

# 若いお母さんたちへ

はるにれの会

## 菊池慶子

「お母さん、『お母さん』って、つらい仕事。」

次女（小学三年）が私の顔をのぞき込んで心配そうにこう聞きます。母親の私が、たまにふっと疲れた表情をしてみせたりするといつもこうなのです。次女のこの言葉と眼差しに私はやっと我にかえり、笑顔をとり戻します。

「とんでもない。最高に楽しい仕事だよ。だってみんな

がかわいいから」

と子どもたちを抱き寄せるのです。いつも明るい母親でありたいとは願っていても、こんなことを時々くり返しているというのが正直なところなのです。

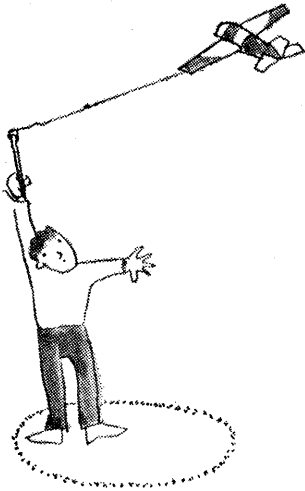
ある高名な数学者が、その教育論の中で、「とにかく子どもにとっては、いつもハッピーな母親というのが最高の母親だ」と書いていましたが、その通りだろうと思



います。しかし、「面倒なことは考えなくていいのだ。とにかくハッピーでありさえすれば——」などと腹を決めてはみても、現実にその日その日を暮らしてみれば、むしろハッピーであることこそが難しいと感じられるのです。今の時代、子育ての日常というのは実に事が多いのです。でも、母親となって十年と少し（長女小学五年、次女、長男小学一年）、少しずつではありますが、やはり心の在り方は変って来たように思われます。ちょ

うど、何の自信もなく放り投げられた海で、もがいているうちにいつか呼吸をつかみ、余計な力を抜くことも覚え、やがていくらか泳げるようになっていく——というような感じで、「母親であること」も身についていくものかも知れませんが、私もまだまだ「これから」の母親に過ぎませんが、より若いお母さんたちのために、今思い起こせるところを綴ってみようと思います。

初めて母親になった頃というのは、誰にとっても戸惑



いの連続だろうと思います。私にとってそれはもう一昔前のこととなってしまったのですが、他のさまざまなこととは記憶から消えてしまっても、初めての子どもを育てた頃の思いというのだけは、いつまでも心に残るものようです。

今、特に強く思い起こされるのは、「自分は親というものになったのに、何と我が子のことでも動揺しやすいのだろう」という、親としての自分のいかにも頼りない姿への困惑の思いです。かつて自分自身が子どもでもあった頃、「親」というのは、とてもゆるぎない存在のように見えていました。いつも自信にあふれ、迷いのない決断を即座に下すことができて。それにひきかえ、このなりたての「親」は何と不安定で頼りないことか——。泣きやまない赤ん坊と、一緒に泣きたい気持であやしなから、それでも、いつかは自分も「ちゃんとした」「オタオタしない」親になりたい、いやなれるのだ、という、漠然とした確信のようなものを抱いていたように思いません。

しかし、道は決して平坦には出来てはおらず、一つ山を越せばまた——というように、子どもの成長とともに形を変えて諸々のことがやって来て、この「親」は相変らず自信なくオタオタし続けなければなりませんでした。

幼稚園に入ってみれば、どうも我が子はよその子に較べて「出遅れている」ように見えて気になり出しました。「一人一人子どもは違うのだから」と頭ではわかっていたはいても、その時は心が揺らいで仕方なかったのです。時に我が子をせき立ててみるような場面もありましたが、失敗と反省をくり返し、あれこれと思いつめぐらうちに、いつともなく、子どもを比較することの無意味さに心から気付くことができたように思います。本当にいつの間にか、そういうことでは動揺することはなくなっていました。

また、我が子が「よその子にいじめられた」と泣いて帰ったというような時にも、この「親」は、子どもと一緒に帰って、胸がしめつけられるほど悲しくなってしまう

いました。子どものけんか、と一笑に付すことがどうし  
ても出来ないのです。今なら、「それも大切な経験なの  
だから……」と心静かに見守ることも出来そうですが、  
その頃はともそこまでは到達していなかったというこ  
となのでしょう。周囲を見れば、自分と変らない年代の  
若い親たちが、自分よりはるかに落ち着いて、上手に子  
育てをしているように見えて仕方がなく、自信をなくし  
かけるということも度々でした。

こんなこともありました。長女が小学二年のころのこ  
とでした。遊びから帰ってきて、突然、「お母さん、ネ  
コを飼いたい」と言いだしたのです。話を聞いてみる  
と、こうなのでした――。

長女の友だちの家でネコを飼っていて、そこに何匹か  
子ネコが生まれたそうなのです。その家ではそんなにた  
くさん飼うわけにはいかないので、生まれた子ネコは捨  
ててしまわなければならぬわけです。昨年も、一昨年  
も、生まれた子ネコたちは段ボール箱に入れられて川に  
流されていったし、今年もそうなるだろうというので

す――。

友だちのそういう話を聞きながら、長女はすっかり子  
ネコがかわいそうになり、何としても自分が助けてやろ  
うと心に決めて帰って来たらしいのでした。夕食の時も  
ネコのことばかり言い続ける長女に、「ネコはかわいそ  
うだけれど、家では今いる一匹の犬でもう十分なのだか  
ら」と、この時ばかりは私も断言したのです。私の様子  
に長女は黙ってしまいましたので、きつとあきらめてく  
れるだろうと私も軽く考えておりました。

ところが、長女は夜中に激しく泣き出したのです。行  
ってみると、「お母さん、子ネコがかわいそうだ。川に  
流されて、海まで行ってしまふ。おぼれて、死んでしま  
う。いやだよ。いやだよ」その言葉に、長女がそこま  
で思っていたのかと改めて驚き、母親の私の心も揺れに  
揺れました。確かにその通りなのです。本当に子ネコは  
かわいそう。その子ネコを何とか助けたいという長女の  
気持も本物です。でも……。「また明日考えてみよう。  
何かいい方法があるかも知れない」そうは言いながら、

「かわいそう」「でも飼うことはできない」この二つの思いの間、私はただ、迷うばかりでした。

また私は、この長女には、いつかこんな問いをぶつけて来られたことがあったのを思い出していました。

「お母さん、サンタクロースは、どうしてアフリカとかの本当に困っている子どもたちのところに行つてあげないの？ 食べる物や着る物をいつも待っているのに」

そう言われて、どうにも答えようがなかったのです。この時は、長女がまだ小さかったのをいいことに、うやむやにしてみましたから、今度こそは、親も考えるだけ考えなくてはなるまい、そうも思っていました。

翌朝、子どもたちを送りだした後、私は教会に行き、牧師さんのところを尋ねました。この教会は、子どもたちが入った幼稚園の付属しているところで、牧師さんはその園長先生でもあり、長女のこともよく知っておられる方でした。子ネコの件を、この牧師さんに相談してみようと思つたのです。

「ウーン。Mちゃんならそう考えるだろうなあ」

話を聞き終つた牧師さんは、考えこんでしまいました。そして、ポツリポツリと、ご自分にもかつてそういう経験があつたということをお話されました。

牧師さんの、今はもう成人された息子さんが小学生のころ、捨てネコを拾つて来たことがあつたのだそうです。かわいそうで仕方なくて二晩ほど家に泊めたのだそうですが、やはり飼うことはできないのだと何とか説得して、元の空地に一緒に戻しに行ったということでした。

「あの時は、子どもだけじゃなく、親の方もとても辛かつたですよ。しかし、その辛い思いを子と親で共にしたということ、今にして思えば、大切なことでしたね。それに、Mちゃんは、この世にはかわいそうなネコたちはいっぱいいる。ネコだけじゃない。人間だって——。そんなことまでも思つて、涙がとまらなかつたのです。う。こういうことにいい解決法なんてあり得ないです。親が子どもと一緒になつてオタオタする。それしかない

です。それでいいんですよ」

牧師さんの言葉に、やはり来てよかったとつくづく思っていました。私がそれまで漠然と思ひ描きめざしていた「毅然たる親」ならこんなネコのことぐらいで心騒ぐことなどなかったでしょう。いくら子どもが泣こうとも平然と片付けることができたでしょう。しかし、私にはそれは出来ない。自分の心に正直に子どもと付き合っていきたい、あえて、「オタオタ」し続けよう、そんな覚悟のようなものが、この時心に出来たように思います。また、それまではただ忌むしものでしかなかった、この「オタオタする」という言葉が初めて何か深い意味のありそうなこととして見え始めてきたのでした。

教会など行ったこともない私が牧師さんのところを尋ねて来たことを話すと、長女はとても驚いた様子でした。その後、ネコのことは親子で何度か話し合いましたが、いつのまにかあきらめる方に向いていき、忘れたわけではないけれどお互いに話題にしくなりました。ただ、この頃からますます、長女は、草花や生き物に対し

て優しくなっていくたように思われます。

そのうち、今度は「テレビ」のことで三人の子どもたちがそろって騒ぎ出しました。「夜九時からの番組を他の友だちは皆見ているのに、家だけ見せてくれない。だから皆と話が合わないし、ばかにされる」というのでした。我が家では遅くとも九時就寝と決めていて、他のことではかなり大様になっているつもりのも、このことについてだけは譲らないので、子どもたちの申し出も初めはおそろおそろものでした。しかしそのうち向こうも勢いづいて来て、「うちは本当に時代遅れなんだから」とか言い出しました。早寝早起きの習慣はやめるわけにはいかないとは思いますが、内心では「もっと自由にさせて、任せてみた方がいいのだろうか」とも思ったり迷いました。

しかしいつのまにか、その番組が終ってしまっただのか、言いたいことを言ったので子どもたちの気が済んだのか、話に上ることはなくなっていました。

そうこうしているうちに、今度やって来たのはファミ

コンブームです。とにかく子どもたちには身体を動かす遊びを、と思っていましたし、いつの間にか三人とも大変な読書好きに育っていましたから、そのようなものは入りこむ余地なしと勝手に思いこみ、周囲で「買った」という話を聞いても何とも思わずおりました。しかし、子どもたちにはそれなりの仲間うちでのつきあいというものがあります。「皆が持っているからほしい」やはり口々に言い出しました。一人一人の言い分を聞いていると、なるほど、そう思うのも無理ないだろうと思ってしまうのですから、やはりまたオタオタし始めました。

その時々の子どもの世界の流行——それとて、商業主義に生きる大人が仕掛けたものに過ぎないのでしょうが、それでもやはり、全く無意味なものとして無視し切れることもできないのです。子どもの身になってみれば、何とか一緒に考えてみてやりたい、そう思っていた矢先、学級懇談会がありました。それで私は、このファミコンのことを話題に出してみたのです。

「買うつもりは毛頭ないのですが、子どもの気持になっ

てみると、全く無下にもできないような気持になって……」

私の話し方は、心境そのままに、極めて歯切れの悪いものでした。すると一人のお母さんが、

「やはり親のしつかりした価値観が大切だと思えます。家では、そういうものにはお金は使わないと決めて守っています。子どもたちも納得し、旅行とか、意義あることにお金は使っています」

と、何の迷いもない様子で話をされました。

確かに正論です。私とて、この正論は考えにあるのです。この正論でどこまでも子どもたちを押し切り口を封じてしまうことは、あるいはた易いことかも知れませんが、でも、私が他の親たちと話してみたのは、正論はわかっているし、それを变えるつもりはない、しかし、生身の子どもたちを前にしてのこの「心の揺れ」、これをどうしようという、何とも把えどころのない、この部分だったのですが、でも、やはり皆の前に出すには余りにも把えどころのなさ過ぎることのように思えたの

で、私はただ黙って聞いていました。

会が終り、帰途をたどりながら、私は、正体はまだよくつかめないものの、親としての何か新しい心の在り様が開けてくるような気分になっていました。何日かして、ふっと、それは

「オタオタするけれどオタオタしない」

という境地かも知れないと思うようになりました。

「オタオタする」というのは心の揺れであり、やわらかく揺れる子どもの心と、親が、その揺れを共にすることなのではないでしょうか。だから、「オタオタする」とことは、親としてとても自然なことであり、すばらしいことなのではないか——そう思うことで、「オタオタするけれども、その『オタオタすること』に対しては、オタオタしない」という境地が開けてくるのではないかと、と思うに至ったのです。

そしてまた、振り返ればいつも毅然とした姿でばかり見えてくる自分自身の親たちも、内面では本当に揺れていたのではなかっただろうか——いや、きっとそうだったに違いないと思うのです。今、この私も親として、子どもたちには恐らく同様に自信ある存在として映っているのでしょう。大人であるというだけで、子どもにはそう見えるものですから。

しかし、親子の間がいつも正論で割り切れて迷いのない状態であるというのは、あり得ないし、あったとしたら、むしろ危険な状態だろうと思います。

いつも混沌としているからこそ子どもなのだし、いつもオタオタしているからこそ親なのではないか——今心からそう思うのです。かつて母親になりたてのころの気持を思い返すと不思議なくらいですが、子どもたちとの日々の暮らしが、いつのまにか発想を変えさせてくれたものようです。

これからも、思いめぐらすことを大切に、オタオタし続けてみたいものです。